
恋姫無双～龍の如く～

bigboos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双～龍の如く～

【Zコード】

Z5641Y

【作者名】

b_i_99000

【あらすじ】

ある日暴走車に引かれて死んでしまった鬼龍和人、目の前に爺さんが立つていて二つの選択を言われた、ここに残るか・異世界に行つてやり直すかと言われた。この話はぬらりひょんの孫×デビルメイクライ×恋姫無双・・などまあ、チートを使っています
初めて書くので恋姫無双などに關して「知ったかぶつてんじゃねーよ」とか思う人がいると思いますが許して下さい

第一幕 僕は・・（前書き）

どうもひらばーすです初めてまして、いや～書くのは初めてなので応援よろしくお願いします

第一幕 僕は・・

あの日、こつもじひでじに過りていた僕はその日

聖フランチスカ学園から家に帰るとしていたところに

突然、暴走車が突っ込んで来てかわせず死んでしまった・・・

う・・・うは

「よひやく田を覚ましたか・・・まつたく」

あんたは・・

「ワシか?ワシはただの爺やんぢやよ」

そつか・・で爺さんじやなんだ

「じいか?じいじやのせじや」

え・・・ええええええええ?

うそだろ?なんで俺死んだんだよ?

「お主暴走車に引かれてしんだじやろ・・・」

うーんあんまり記憶にない

「本当にうお主はあやしむ死ぬはずはなかつた、じゃがお主が死んだ時

本来なら輪廻の輪に戻るはずだつたんじやが、なぜか輪廻の輪から外れてしまつたんじや（笑）」

なんでアンタ笑つてんだよ？（怒）

「まあそれはとにかく、この後お主はどうしたいんじや？このままでここにいるか？」

それとも、異世界に行つてやり直すか？お主の好きな方を選ぶんぢや。」

え・・・それはここに残るのはさすがに嫌だけじ、向こうの異世界に行つたら赤ん坊からやり直しなのか？ていつか異世界つてどんな世界なんだ？それによつて決まるけど・・・

「ん？その世界は・・・ま行つてからのお楽しみじや」

うーん、どうしようつ・・・。

俺なりに考へたすべ、結論ここにいるのは暇だと思つたのド・・・

爺さん、俺異世界に行く

「む、やつかでせうべく・・・」

ちゅつとまつた―――？

「つお？なんじやこきなり、大声出しあつて？」

赤ん坊からつて言つのはちよつと氣にへわねえな、せめて二十才にしてくれ頼む？

あと何個か願いを叶えて欲しんだ

「わがままな奴じゃな・・いいじやう、で他になにを叶えてほしん
じや？」

第一幕 僕は・・（後書き）

途中で終わつてしまひました、スマスマセン次回は主人公がいろいろ
いふと
チートのような事を言ひます
アドバイス宜しくお願ひします

第一幕 ルーファーから

まず一つ目は「ビルメイクリーズのページ」と、服装と髪型意外は全て同じで、

二つ目は外見だけどぬらりひょんの孫に出てくるので、まあなんでもいいです

四つ目は年齢は二十歳にしてくれ、赤ん坊の頃からって言つのはあまりにも嫌だから。五つ目は、女性に多少モテル

ぐらいにしてくれ、最後はどんな傷でも治せる薬をくれ

「つーむ、まあよこじやろ 一つ目と四つ目は叶えてやります。二つ目じゃが外見は

なんでも良いと言つたが、本当に何でもいいんじやな？」

ああ・・いいけど

「つむ、分かつたあとで後悔するんじゃないぞ、よいな？

五つ目は十人中七人が振りかえるぐらいでよかう」

まあ・・いいけど

「最後の願いじゃが、この薬を持って行くがよいどんな傷でも治せるものじゃ。

じゃが、悪しき者には使つでないぞ、いいな？」

分かつた

「それでは早速異世界に送るからの、元氣でのう・・

「おひと忘れる事じやつたお主なはなんと申す

俺の名前は鬼龍和人、向こうの世界では結構優しかったんだぜ？」

「ふむ、鬼龍和人か・・良い名じや異世界でも優しい心を持つのじやぞ。

そして、平和な世の中にするんじや」

そして俺は光に包まれて目の前が真っ黒になった

う・・うーんーいには・・
目を覚ますと川に近くにいた、「ここが三国の世界か・・
ん?何だ手紙か『鬼龍よお主がこの紙を見ているとゆうことは無事
着いたようじやな

お主がいる世界は三国の世界じやが、ただの三国世界ではない、恋
姫無双の世界じやこの世界は

・・・・・とゆう感じじや、あと外見じやがなんでも良いと言つた
ので淡島にしといたからのじやあの』

手紙に書かれたことを理解し、立ちあがつた・・そしてこれからどうしよ。

第一幕 めいじ時代から（後書き）

いつも、寒いです。今回、これから同じで終わってしまってス
イマセン

次回、鬼龍はとりあえず人に会つために歩いていると、山賊が一人の女子を囲んでいた。鬼龍は助けようとする・・

第三幕 黒髪の女～前編～

俺はとりあえず人に会うために道を歩いていた
「ん？ あれは・・・」

よく見ると道の端つゝ二人の男とその前に一人の少女がおびえていた

『へへへ、金目の者を渡しなへへへ』
『そりだぜ速く渡しな』
『は、早くわ、渡すんだな』

なんだあいつら、人の金を奪うのが、と言つ事は山賊か・・・
とりあえず助けるか

「おーいそこの人」

『ああ？ なんだガキ』

ガキとは失礼な、二十歳だぞ

「その娘おびえてんだろ、離してしてやれよ」

『なんだと、部外者はどうか行けよ』

そう言いながら山賊の一人が、剣を抜いて俺にむけた

「おい、もう一度言つて、その娘を離してやれ」

俺はそう言いながら閻魔刀を鞘に入れたまま抜いた

『お・・なんだやるつてのか後悔すんじゃねえぞ?』

ほかの一人も剣を抜いて構えた

「おい、お前らこそ後悔すんなよ?」

『し、死ぬんだな』

デブが怖そうに突っ込んでくる

はあ～めんどくせ、俺はそう思いながら閻魔刀でデブのみぞおちを
叩いた

『ぐふう?』

『あ、兄貴? デブがやられた?』

『な、なんだと・・ デブがやられた』

おいおい、味方のお前らまでデブって言つなよ

『つ・・? おい次お前がいけ?』

『いやつすよ~ 兄貴が行けばいいじゃないですか?』

なんか、一人でもめあつているな、今のうちに・・・

『ん?』

『なんだ?』

地面を蹴つて、刹那の如く目にも止まらぬ速さで
一人のみぞおちに、閻魔刀を入れた

『ぐふう？』

『あべしに？』

そのまま一人は氣絶した、「ふうへあ・・・大丈夫か？」
少女の所に駆け寄り声をかけると、『あ・・・ありがとう・・・
おびえた様子でこっちを見ている。山賊じやないですよ～～

「ああ心配して、俺は山賊じゃなー」

『ほ・・本當？』

「ああ、嘘はつかねえわ」

『・・・・・』

ああ～警戒してるねえ、まあいいかおつとそれより

「あのや、ここ近くに村とかないか？」

『あるよ、ここをまっすぐ行つたところ』

「そつか、ありがとう・・・あ君はどこで行くの？なんなら送る
けど・・・」

俺がそいつと、『私は、この先にある村に住んでる・・・
ん？じやあ俺と向かう所か

「じゃその村まで一緒に行うつか

『え、でも・・・』

「いこつて、また山賊が出たら危ないだろ？』

『うん・・・』

お、村が見えたぞ。

あれから数分かかってようやく村の少し手前まで来た。よし、あと少しで・・・と思った瞬間、横からいきなり一人の女が俺に向かって槍のようなものを刺してきた。

「うお？あぶねえ？」

少女を抱えて、少し後ろに下がる

「誰だ？」

闇魔刀を構えて俺がそう言つと、黒くて長い髪の女が、

「わが名は関羽？字は雲長？その娘を離せ山賊め？」

と体にまとっていた布を撮り名のつた

こいつが、関羽か・・、男だと思つてたけど、そもそも爺さんの手紙に

恋姫無双とか書いてあつたけど、つて言つた俺は山賊じやねえ——

第三幕 黒髪の女～前編～（後書き）

いつも、お読みありがとうございます。今回やっと武将がでてきました

この後も楽しくしていくのでアロシク

次回は主人公の設定を書こうとおもいます

コメント、感想お願いします

遅くなりながら、オリ主設定

主人公

鬼龍和人（二十歳）

身長：178cm

体重：75kg

体格：無駄のない体。（おもに筋肉）

容姿：心は優しい。外見はぬら孫の淡島

意外に平和主義

聖フランチエスコ学園に通っていた普通の高校生
普段は、テニスなど体を動かす事をしている
怒らせるとたとえ妖怪など、一瞬にして震えあがる
外見が淡島なので夜になると、女の姿になる。
昼は男の姿

三国志はときどきにしか、見てないのであまり詳しくない

武器

闇魔刀

デビル3に出てくるバージル愛用の闇属性の日本刀。「人と魔を分かつ」とも、「闇を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀、鬼龍が使うとバージルを超える力を出す

ベオウルフ

攻撃力があり、攻撃速度も速い。

鬼龍の場合これを使うと拳が痛い

フォースエッジ

こちらは、デビル1に出てくる。ダンテが装備しており、アミュレットがそろうと魔剣スパークになる

鬼龍はこれを危ないときや助けるときにつかう

幻影剣

魔力により出来た剣。

自分の周りや相手の周りに、設置できる。その場から直接相手に放つことができる

最大でも五人まで同時に攻撃出来る

ダークスレイヤー

敵の前方・上方・下方（地上だと後方）へ瞬時に移動し一気に間合いを詰める事ができる。移動・回避にも役立つ

鬼神の“鬼憑”完全なる父性 “伊弉諾”^{イザナギ}

鬼龍が男の姿の状態で闇魔刀を装備している時に発動できる
どんな相手でも一刀両断できる、そのためには「畏」を溜めて一気に放出する

この技はねら孫の淡島ので、魅を放ち鬼の如く恐怖に落とし入れる

天女の“鬼憑”完全なる母性 “伊弉冉”^{イザナミ}

鬼龍が女の姿の状態で発動できる、武器は必要なく混乱している味方に対しても使用する
使用すると少し疲れる

戦乙女演武

乙女の“”とく艶やかな舞で翻弄する。

これも、女の姿でしかできない。

魔人化

武器はどれでもよい、男の姿でしかできない

覚醒・魔剣士スパーダ

鬼龍が怒りや悲しみが頂点に達した時だけに覚醒する

武器は魔剣スパーダ、姿は攻撃をする時だけスパーダの姿になる。常に、周りには幻影剣が配置しており、攻撃してくる敵には容赦せず、降伏する敵にはみぞおちを入れる。

背後にはイザナギの姿が見える。（なぜか・・）

この状態の時はどんな攻撃も全く効かない。（たとえ、マグマでも、レーザーでも）

遅くなりながら、オリ主設定（後書き）

オリ主の設定は話が進むたびにたまに変わります
まあ・・あまり変わらないとおもいますが。
鬼龍は、もう最強になつてると思います

次回鬼龍はいきなり出てきた関羽と戦う事に・・・

第五幕 黒髪の女（後編）

愛紗

「愛紗（あいさ）、村はまだなのか（く）鈴々は疲れたのだ（だ）」

「私も疲れちゃつたよ（う）」

「桃香様しつかりしてください、鈴々もしつかりしろ（しろ）？」

「うむ、私も少し疲れてしまつた（だ）」

「一人ともみつともない、おまけに星まで（ほし）・（ほし）・

「朱里（しゆり）、雛里（ひなさと）大丈夫（だいじょうぶ）か（か）？」

「はい、私は大丈夫（だいじょうぶ）です（です）」

「は、はい大丈夫（だいじょうぶ）でしゅ（でしゅ）、はわわわ・・・噛んじやつた（かんじやつた）・・・」

二人は大丈夫（だいじょうぶ）のようだな

それから少しして、道ばたに三人の男が倒れていた。

「桃香様（とうかさま）？ 人が倒れています（います）？」

「え？ いつてみよう（みよう）？」

急いで倒れている三人の男もとへ急ぐ

「大丈夫（だいじょうぶ）か？ しつかりしろ（しろ）？」

「大丈夫（だいじょうぶ）ですか（ですか）？」

『う・・・ひい（ひい）？ ち、近寄る（ちかづく）な（な）？』

何を言つているのだこの男たちは

「落ちつけ何があつたんだ（だ）？」

星がそう聞くと

『さ、山賊（さんぞく）が、おらの娘（むすめ）をさらつたんだ（だ）？』

「何だと（だ）？ それで山賊はどつちに行つたんだ（だ）？」

星がきくと、『た、確かに向こうの村の方に行つた気がする・・・

「村か、分かつたあなたの娘を助け出そつ」

『本當か？ありがとう』

「おい、愛紗その山賊の特徴をきいとかないでいいのか？」星が言つ

「あ・・そうだつた、山賊はどんな姿だ？」

『腰に黒い刀をしていて、あと・・すまん忘れてしまつた』

黒い刀か・・・この国の者じやないそつだな

「よし、星、鈴々助けにいくぞ？」

『鈴々はつかれたのだ』

「私も疲れてしまつた、少し休ませてくれ」

「まったく、じゃ一人は桃香様を守りながら後からきてくれ」

そつ言い残して私は一人、腰に黒い刀をさしている山賊を探しだした

はあ、はあ、どこにいる、あれからずいぶんと絶つが黒い刀を持つ
ている

山賊はどこにもいない。

「向こうの方を探してみるか・・・」

向こうに行く途中話し声が聞こえた。

「ん？ あそこにいるのは・・・」

一人の小さな少女と腰に黒い刀をさしている男がいた

『あいつか』

そのまま山賊に向かつて青龍円月刀を向けた。

「うお？ あぶねえ？」

相手は少女を抱えて後ろに下がった。

「誰だ？」

男が見たこともない剣を向けて行つた

「わが名は関羽字は雲長？その娘を離せ、山賊め？」

鬼龍

なんだこの女、いきなり人に槍のようなものを突き付けて、礼儀をしらねえのか

「おい、いきなり襲つてきやがつて、お前も山賊か？」

「なにを言つたか、お前こそ山賊だろう？」

「・・・？、なに言つてんだよ山賊なわけねえだろ」

そう俺が言つと、「つむさい、山賊め？覚悟ー」

ブン？ ガキンン？

俺はすかさずフォースエッジに武器を変え関羽の攻撃を防ぐ

「くう・・・・？何すんだよ？話をきけよ。」

「問答無用？はああああ？」

く・・・・このままじゃ、ん？そつだ・・

何だこの男、ただの山賊だと思っていたが違う、この男はまるで・・

・

よし、いまだ。

ブン？ 残像を残しながら相手の目の前に移動する

「え・・・」

そのまま、相手の足をはらつた

「きや？」

そのまま地面に倒れこみフォースエッジ突き刺す。

「これで「まつてください?」なんだ次は」

そこには五人の女が後ろに立っていた

なんだこいつら・・・

第五幕 黒髪の女～後編～（後書き）

いつも、やっぱり戦闘のところは書くのが難しいです。
でもまあがんばります

次回、鬼龍は誤解をやっと聞き入れてもらい、五人の女の子達と村に
目指す、しかしそこには鬼龍が倒した山賊三人組が待っていた。

第六幕　願い（前書き）

今気がついたけど第一幕以外は全部（改）になっていた（笑）
その理由は、すべて途中で作成を終えたのでまた途中から、するこ
とに
なったんです

第六幕　願い

鬼龍

「で、その男三人達に山賊が娘をさらつたって聞いて俺を襲つたのか

「申し訳ない」

頭を下げる謝る関羽

「むやみに人の言つ事をきくな」

「…………本当に申し訳ない（『やれこません？』（のだ……）』」

「」他の五人も一緒に謝つていた

「あ、いやそこまでしなくてもいいから、頭上げて」

「え、あはい」

「うむ」

「お兄ちゃんは優しいのだ」

「優しい方ですね」

「本当だね」

「や、優しい人でしゅ、歯もじやつた……」

そこまで言わなくて……と、そうだけの子をむりに連れて行かないと

「じゃあ、この子を村におくるから、なんならあんた達も一緒に来るか？」

「え、どうして？」

「いや別に、あんたらどうに向かつてんだ？」

「あ、この先にある村に行こうとしていたんです
村か、じゃあ俺が行くとか……」

「じゃあ行くか？一緒に」

「え……でも」

何か困りごとでもあつたか

「あ、いやいいんだ。無理に行かなくても」

「あの・・・？」

「何のようだ？」

「付いて言つてもいいですか？」

「も、桃香様？」

「だつて、優しそうな人なんだもん」

「ですが・・・？」

「そうだぞ、案外平和主義なんだぞ、俺は」

「ああ、いいけどその前に一つ質問していいか？」

「はい、何ですか？」

前から聞こうと思ってたけど、たしか別の名前でよんでもたな

「あのや、なんで関羽のことを、愛紗って呼んでたんだ？」

ブン？「今の言葉を取り消せ？」

また、関羽が青龍円月刀を俺に向けて振つてきた

「あぶねえ？なにすんだよ？俺はただ・・・」

「うるさい？黙れ？」

ブン？ブン？

「愛紗ちゃんダメだよ？ちゃんと質問に答えない」と

「ですが、こいつは私の真名をよんだのですぞ？」

「真名？なんだそれ？」

真名と言つた瞬間関羽が睨んできた。本当に知らないんだつて？

「私が説明しますね

“真名”は、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるのです」なるほど、それで関羽が怒つてたのか。

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね、私は劉備、字は玄徳、真名は桃香だよ よろしくね」

「桃香様??なぜ真名を教えるのですか??」

「たしかに、別に教えなくてもいいのに・・・」

「だつて教えてもいいと思つたんだもん」

「だからといつて・・・」

「皆はいいよね」

「私は・・では一つお願ひがある」

関羽の後ろにいた薄青色のした髪の女が言つてきた、なんだねがいつて?

「私と一度手合させを願いたい、もしそなたが勝つたら真名を教えよう」

「え、だめだよそんなことしたら」

劉備が言つと、「鈴々もそれがいいのだ?」

「私もそれがいい、覚悟しろよ・・・」

関羽と鈴々とか名乗る奴に、薄青い髪をした女が言つてきた

「ああ、いいぜかかつてこいよ、三人まとめて相手してやる」

「では、こぞ?」

関羽の掛け声と同時に三人が走ってきた
後悔すんなよ?

第六幕　願い（後書き）

どうも、せりと出来ました。
いやあ～長かったです

第七幕 ベヘリム・

「ヤアアアアアアア？」「ブン？サツ？」

「おっ、鈴々とかいう奴なかなかやるな、

「だが、まだまだあ？」

ベオウルフの籠手を装備して、鈴々にストレートを放つた。

「うわあああ？」そのまま後ろに倒れこんだとたん、関羽が突っ込んできた

「ハアアアア？せい？」

ギイン？「痛つて？」「ベオウルフで関羽の攻撃を防いだけど、少し痛い。

「！」の？」関羽にも、ストレートを放つた。

「さやあ？」関羽はそのまま、後ろに倒れた。

「おいおい、まだ出来るだ「さきあり？」？」

くそ？よけきれない？・・・よし

「せいやあああ？」スカ、え・・・

「！」ひちだ。」

危なかつた、もう一人いるのを忘れてた、そう思いながら薄青色の
髪を持つ

相手の後ろに回り込んで、閻魔刀を突き付けた。

「くつ・・・?私の負けだ・・・」

ふうへやつと終わった、さすがに疲れたな。

「三人とも大丈夫？」

劉備が三人達に近寄り声をかける。

「あの、大丈夫ですか」

横に一人のかわいらしい少女が近寄つてきて、じつちを見ながら聞いてきた。

「え、ああ大丈夫だ、ありがとな」

二人の頭をなでてやつた

「 / / / / い、 いえ / / / / 」

なぜか一人の顔が赤くなつた、熱でもあんのか？

「おい、約束」

そう言うと薄青色の髪の女が立ち上がり、こつちに歩いてくる。

「私の名は超雲、字は子龍、真名は星だ」

超雲か、たしか槍の使い手だった気がする、真名は星か。

次に一人の少女がこちらを見て

「私の名前は諸葛亮、字は孔明です、真名は朱里です」「はわわわ、私は鳳統、字は士元、真名は離里でしゅ、はわわわ囁んじゃった」

小さい帽子の方が、諸葛亮で真名が朱里か、で青い帽子の方が鳳統で真名が離里か。

この二人は知つてゐるぞ、天才軍師だったな（確か・・）

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ、真名は鈴々なのだ」

張飛か、確かに酒が大の好きつて書いてたな真名は鈴々か、自分で言つてたけど。

そして、最後は関羽・・・だと思つたが氣絶しているらしい、そんなに力いたつけ？

「おい、大丈夫か？」

「うへん

反応がない、ただの屍のようだ、とそんなことより

「とりあえず関羽を村に運ぼう、そまだあんた達のことを何て呼べ

ばいいんだ?」

劉備から「真名は愛紗ちゃん以外はみんな、あなたに教えたから真名でよんでいいよ」

「いいのか?」

「つむ、いいぞ」超雲がそつそつ

「鈴々もいのだ」

「はい、いいですよ」

「はい、いいでしょはわわ、また噛んじやつた」

「みんながそつそつない、あ俺の名前は・・・ま关羽が田を覚めてからおしえるよ」

今教えたら混乱するからな、夜も近いし姿の事もあるからな。

「じゃ、星運ぶの手伝ってくれ、もうすぐ夜になるからな」

「つむ、わかつた

「つして俺は、桃香、鈴々、星、关羽（真名はなんか分からん）、朱里、離里達の真名をさずかつた。

れて、いいに来た事情の事を村で話すとするが、ふあああ眠い。

第七幕 よりやく・・（後書き）

どうも、前の文章が読みにくいと思つたひとがいるかも知れません
スマセソ、今回は読みやすくなつてるとおもいます（たぶん）
次回鬼龍は村に着き、宿で事情をはなした、そして・・・

第八幕 真名（前編）

「村についたのだ」

あれから星に関羽を持つてもらつて、村に着いた。

「ふう～やつと着きましたね」

「もう、足がガクガクだよ～」

「大丈夫か？」星

「ええ、大丈夫です、その子はどうするのです？」

あ、そうだったこの子の家はどうだらつ

「自分の家は分かる？」

「う、うん分かるよ」

「じゃあ、教えてくれるか？」

そして、少女の家に着いた

「ありがとうございます、ほらちやんとお礼を言つて」

「あ、ありがとうございます」

「いや、いいんだ次から氣をつけろよ」

よし、これでひとまずはいい、「チヨンチヨン」誰かが背中を突ついてきた

誰だ？

「あの～一つ聞いてもいいですか？」そこには朱里と離里がいた。

「ん? どうした?」聞くと、

「今日、どこで休むんですか?」

ん？休む・・・ビ」で・・・考えた、そして言った。

「分からん（キツパリ）」

二人共目をキヨーンとしている、いやホントどうじょ～？

「あの～、」

「ん？はい」

「もしよければ、私たちの家で良ければ、休まれますか？」

ほ、ホントか？これはラッキー？

「いいんですか」

桃香が嬉しそうに聞いている。

「ええ、いいですよ」

「ありがとうござこます、あと良ければこの人も良いですか？」

星が関羽を指差して言つ、「ええ、いいですよ」

「「「「「じゃあ失礼します（のだ～）」「」「」「」「」

おおお～つまそくな飯だ、「パク」

鈴々が先につまみ食いをした、何をする？（ムスカのように）

「鈴々ちゃん、つまみ食いはいけませんよ」朱里が鈴々を叱つた
「だって、鈴々はお腹がすいたのだ～？まだ食べちゃいけないのか

۱۰۷

「もう少し我慢しろ、私だって我慢してるんだ」と星が言う
「私もお腹がペペなんですよ」桃香先鈴々と同じ様な事を言う

たしかに俺も腹がへつたな

「おまたせしました、えんりょうなく食べて下さー」

「あ、じつもじきー！ いただれぬーか？」 うつむく野郎。

さすがに俺と星はすぐこなは食べなかつた、だつてまだ名前聞いてねえもん

「あの～お名前は・・・」

あ、向こうから聞いて来てくれたありがたい。

「私は超雲、字は子龍、真名は星だ、よろしく！」

「あ、私は劉備、字は玄徳、真名は桃香だよ」

「はわわわ、私は鳳統、字は士元です、真名は離里です」

今回は噛まなかつたな。

「鈴々は、張飛、字は翼徳なのだと、真名は鈴々なのだと」

私は諸葛亮、字は孔明です。真名は柒里です。宣いく。

「星さん」、桃香さん、鈴々かやん、離里かやん、朱里かやんです

ね私は南葉といします

「おへじひがん ちひがん」

「――は、はこ――」ちゅうと墨れくせんつにしながら書いた。

「で、あなたのお名前は？」

「あ、俺は・・・後で皆が集まつた時に聞こます」

それから数分後、奥の部屋から関羽が顔を出した、

「なにやら騒がしいですね」

「あ、愛紗ちゃんさつと起きた～」

もう腹いっぱいだ、ゲップ

「いっぱい食べたのだ～」

「つむ、これ以上は食べれないな

「おいしかったです」

「おいしかったですね」

「お、関羽やつと起きたか」

「き、貴様、なにをしている?」

「いや、何つて飯を食つてただけだけど、なあ桃香

「はい 愛紗ちゃんむどうぞ、おいしくですよ～」

「え、いや私はあまりお腹は・・・」

ギュルルルルル～～～

「／＼＼＼＼」、これは違います？そ、その・＼＼＼＼＼

「えんじょしぬくてもいいんですよ、セビ'ハル」

「じゃあ、お言葉に甘えて、いただきまーす」

パクパク、もぐもぐ、凄い勢いで食べてる

「お名前は？」

「わ、私は関羽、字は雲長、真名は愛紗です」

「愛紗さんね私は南葉、この子は凜と言います、娘の事は有難うございました」

「い、いえ」

「ところであなたお名前・・」

「あ、皆いるな、じゃあ俺は鬼龍、字は和人、真名はない、あと俺は異世界から来たんだ」

この後、事情を説明した。

第八幕 真名（前編）（後書き）

書いてたら文が多くなったので、前半と後半にわけます

第九幕 真名（後編）

「…………」

混乱している、まあ確かに異世界から来たって言つのもつかへてしまいしない

「異世界？それってどんなところなんですか？」

朱里が聞いてきた。

「うーん、説明するのがむずかしいから手短に言つと……」

そこから手短に事情を話した。

「と言つわけ、わかつた？」

「なんとなくはわかつたけど……」

「それが本当ならすごいことなのだ？」

「たしかに、すごいことだね～」

「うむ、確かに手合させした時も珍しい武器を持っていたし……」

星が俺の持っている武器をジロジロ見てきた

「たしかに見た事ない服を着ていますしね
「確かに」

朱里と離里は服が気になるらしい

「あー、真名が無じゃ駄のせやつ事だ」

関羽が訪ねてきた

「ああ、説明する前に関羽、あなたの名前愛紗って呼んでもいいか？」

「え、ああ約束だかな」

よし、じゃあ説明しちゃう

「真名は親からもらつんだろ?」

「ええ」桃香が答へた。

「うーん、だいぶ

本当なんだよ~

「あと、もうひとつ見せたいものがあるんだけど」

「なんだ」「

「なんなのだ？」

外はもう夜になつていた、月がきれいだ。

「で、なにをみせるんだ」星が聞いてきた。
「もひそかそらだと思つたけど・・・

そして、体が光に包まれた。

「 「 「 「 「 ？」 」「 」「 」「 」

「か、体がひかつてるよ～？」

「ど、どうしたのだ～？」

「なんだ・・・？」

「こわいです～」

「はわわわわ

次の瞬間、光が消えて男だった俺が姿が女になっていた、そうこれが妖怪・淡島の特徴

淡島は昼になると男、夜になると女になる妖怪。

「き、鬼龍さん・・・？」

「どうして、女になっちゃったのだ～？」

「信じられん・・・」

まあ、無理もない、姿の事を言つてないからな

「実は俺、昼は男、夜は女になる妖怪なんだ、ただし全部が妖怪じゃない

何て言うか半妖半人なのかな、この場合」

「半妖半人? 何ですかそれ?」 朱里が不思議そうに聞いてくる

「え、ああそれは・・・」 俺が答えよつとすると

「半妖半人っていうのは、半分が妖怪で半分が人間という事だ」 星が話してくれた
なんで知つてんだ?

「ああ～なるほど」ポンと手をたたいた。

「じゃあ、お風呂はどうするんですか?」桃香が聞いてきた

「え、うん一応俺は男だつたからな、男湯だろ」

「胸がおつきいのだ？」

おこおい、やこじ田をやるか？普通、でもあひつひょんこ、出でくる淡島は

「―――」「うう、鈴々、そんな事をあくな?――」愛紗が顔を赤らめながら鈴々を叱った

「愛紗よりも、大きいのだ？」

「余計な御世話だ？」愛紗が大声で怒鳴った、ちょっとは声の音量下げるよ、夜だぞ今。

「そもそも何の妖怪なんですか？」離里が聞いてきた。

「淡島つていう妖怪なんだけど」

「じゃあ、真名は淡島でいいんじゃないのか？」星が言つてきた

「いいんじゃないかな
「それでいいと思うぞ」

「そ、それでいいのだ～」なぜ泣きながら言つてゐる鈴々よ
「私もそれがいいと思います」
「え、はわわわ、いいと思います」

皆が嬉しそうに言つた、鈴々以外は。

「じゃあ今日から俺の真名は淡島だな、よろしくへ

「　　「　　「　　「　　「よろしく頼む（なのだ～）（おねがいします）」「　　」「　　」「　　」

この後俺は風呂に入り、早く寝た・・・

第九幕 真名～後編～（後書き）

どうも、今回は主人公の真名を決める話でしたけどいかがでしたでしょうか

途中、少し色気のようなものを入れましたが、まあ、どうでもいいですねはい。

第十幕 旅立ち・・のはすが

「うへへへへん、はあ～」

いい天氣だ、何かいい事がありそうだな

「淡島さん、おはよ～いります」

「ああ、おはよ～」

そこには朱里がいた。

「昨日は大変でしたね」

「まあな、でもあれで全部分かつたからいいんじゃないのか？」

「そうですね」

朱里が小さく笑う。

「む、何だもう起きてたのか」

星が少し眠たそうにしながら、起きてきた。

「おへ、おはよ～」

「せうだ、いつ聞こいつか思つてたんだが

「ん？」

「『れかうの前の事をぞひびばいんだ?』

「ぞひびて・・・鬼龍でもいし真名で呼んでもこけぞ

「つむそつか、ではこれから和人と呼ぼつ

下の名前でか、まあ呼びやすいしいんじゃね。

それからして、桃香達が起きてきた、桃香はなんだかボケているのが何回か柱に頭をぶつけていた。

「ふわ~良く食べた

「お口あつじよかつた」

「有難ひいざわいます、何から何まで・・・」

南葉さんが俺たちが泊る所がなかつたとき、家に泊めてもらつた
その南葉さんの娘が山賊達に襲われた所を、俺が助けてやつた。

「『のあとはどうするの?』

南葉さんの娘凛が聞いてきた

「『の後は、南に行つてみたいと思います』

桃香が行く場所を示した。

「やうですか、また『』を通つた時はいつでもきてくださいね

「有難うござります」

あれから少しして、二人から車で旅立つので食料などを調達してから出発することになった。

「よし、これだけでいいな」

「ああ、もうだな」

「少し荷物が多くなったのだが~」

俺と愛紗、鈴々で食料の調達に来ていた、桃香と星、離里は別の買い物をしている。

「じゃあ、帰るか」

「やうだな、長くこては時間がないからな

「やうですね」

帰ろうとした時、向こうから声が聞えてきた。
なんだ?

「スマン、先に帰っててくれ

「どうしたのだ?なにがあるのか?」

「いや、ちゅうどとな・・・」

荷物を愛紗達に任せて、声がする方に行つた。

そこには、俺が最初に会つた山賊達が店を荒していた。

「やめてください? なこをするんですか?」

「へへへ、じゅあ金を出しなそれで許してやる

「やつだぞ、兄貴の言ひておつしゆ~

「は、早くするんだな」

あこひり・・・前の中つで懲りてなかつたのか

「おこ、何やつてんだ」

「ああ、なんだ・・・つてお前は? この前の?」

「おこ、お前(ひ)の前で懲りたんじゃねえのか?」

「ぐ、あんなんでへこたれるかよ」

「今回は許す気ねえからな・・・」

闇魔刀を一瞬で抜き、小柄な奴を斬つた。

「ああ……？」

「な、ないしやがる？」

「黙れ……」

せりひそのままHアトリックで兄貴の近くに行き、縦、横に切り捨てた。

「ぐあ……？」

「残るのはお前か……」

「ひい？ ゆ、許してくれだな？」

「だめだ、お前らは人を傷つけた」

デブの男を睨みつけ、体中に畏をあふれ出し
「鬼神の“鬼憑”完全なる父性 伊弉諾^{イザナギ}・・・」

そして・・・

「あ、やっと帰ってきたのだ～」

「遅かつたではないかなにをしていたんだ？」

「いや、何でもないただお仕置きをしていただけだ

「…………」

第十幕 旅立ち・・のはすが（後書き）

どうせ、今回も馬鹿になってしまった。
さて、やつと戦いが出てきました
これからも直しくお願ひします

第十一幕 旅

「では、これで」

「気お付けてくださいね」

「はい」

桃香があこがれを済ませ、村を出ようとした

「あの？」

「ん？ 凜ちゃん何か用かな？」

何だらう？ 僕はそう思いながら振りかえった。

「これ・・・私が大事にしてたお守り、鬼龍さんにあげます」

「いいのか？ 大事にしてたんだろ？」

「いいんです、山賊から私を助けてくれたお礼です」

とても大事にしていたんだろ？ 握ったあとが着いている。

「じゃな、元氣でな」

そう言い残すと、俺たちは村を出て南に向かった。

「鈴々はお腹がすいたのだ～」

「もうだな、もう少ししたら飯にしよう」

「そうですね、村を出てから歩きっぱなしですしね」

朱里と鈴々が腹をすかしていた。

「桃香達は大丈夫か？」

一応桃香と愛紗、星、離里にも聞いてみよう。

「私もお腹す～じゃつた～」

「もうだな、すこし早いが皿にしよう」

「うむ、賛成だ」

「わづですね」

全人賛成のようだ、じゃ飯にするか。

「どうでたべるのだ？」

鈴々が聞いてくる

「やうだな……お、あの木の陰で休もう」

そして、木の陰で飯を食べていた

「つまーな

「せうですね

「鈴々、よく歯んでから次を食べよう

「わかつてゐるのだ~」

「お、おこしこです

「確かにな

ぱつぱつして食べている

「よし、そろそろ行くか

昼を食べて少しした後、俺が言い張った。

歩き始めて数十分、桃香が話してきた。

「鬼龍さん、すこし寄つて行きたい所があるんですけど……」

「ん、寄つて行きたい所? ビニヨンあるんだ?」

「！」のまままっすぐ行った所にあるんですけど……」

「まあ、別にかまわないが、どうして?」

「え、それは……」

何かいいいたくない事でもあるのか? まあいい

「お~い桃香が寄りたい所があるらしいから、そこで宿を探してみよ!」

「え、まあ構わんが、なぜ?」星が聞いてくる

「桃香が寄りたいんだよ」

「桃香様、そこに行きたいのですか?」愛紗が訪ねてみる。

「コクン」言葉を言わずにはなずいた、気のせいか少し桃香の様子が変な気がした

それからして、数十分後、桃香が来たかつた所に来た、最初に見て思つた事

その一、土地が広く奥には城らしき建物があつた

その一、「少し賑やかだが、なんだか明るくない

「なんですか」」は？」朱里が聞いてきた

「わからない、桃香が来たかつた場所なんだろう」

「向」」うから誰か来るぞ」星が向」」うから来る誰かを見た。

人影が見えると、今までにぎわっていた人たちが静かになった。

「ビビビ、どうしたんですか？急に静かになっちゃって」

離里が怖くなつて俺の背中に隠れた。

「大丈夫か離里？怖いなら隠れてる」

「フフフフフ、やつときてくれましたね、待ちくたびれましたよ」

「何だこいつ、見かけからして俺より少し年上の男が部下を引き連れやってきた。

「何者だ？」愛紗が謎の男に問いかけた。

「鈴々、星、桃香を守つとけ」俺が小さな声で一人に言つた。

「つむわかつた」

「了解なのだ～」

「朱里」」うかにこい」

「あわわわ、はい」

とりあえず、朱里と離里を街の人預けてきた。

「よしこれでいいだろ？ でアンタ誰だ？」

男は部下に耳打ちをしていた、なにをたくらんでる……

第十一幕 旅（後書き）

どうも、今回は・・・特にありません
次回はなんとか、戦いを書こうと思います
では、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641y/>

恋姫無双～龍の如く～

2011年11月30日19時49分発行